

林政ジャーナル

No. 1

1989年5月10日

日本林政ジャーナリストの会

就任のご挨拶

森林をどう生かすかに向けて

会長 増田俊二

去る2月20日、日本記者クラブで行われた日本林政ジャーナリストの会の第11回総会で、会長に選任された。重要な時期に課せられた責任を痛感する次第です。振り返りますと、この会が、人間と自然のかかわりあいを大切にしながら、森林のあり方を研究するジャーナリストの会として発足して10年がたちました。

その間、林業など森林をめぐる言論は、年を経るごとに多様性を増しており、時には対立もあらわにしながら展開されて来たように思います。現在は、地球規模の環境問題が盛んに論じられており、7月のパリ・サミットでは、過剰な炭酸ガスによる地球温暖化現象の抑制のため、森林や緑植栽の重要性がコミュニケに盛り込まれそうです。そうすると世界の関心はいっそう森林に集中するだろうし、森林のあり方をめぐる論議は、世界的視野にまで拡がり、ますます多様に展開されると思われます。

先の総会では、89年度の活動計画の中で、年間を通ずる研究テーマを「森林をどう活かすか」とし、林業の活性化はもちろん、幅広く環境問題における森林の役割まで、取り組むことになりました。間口が広いだけに議論は百出するだろうし、それだけに組織の運営は大変だろうと思います。言論の多様性を尊重しながら、なんとか研究の中で、会員の皆さんがメリットを感じるような会の運営に努めたいと考えます。幸い新任の副会長に、長い間の同僚である大谷健さん（朝日新聞）、ベテランの二村寛壽さん（林業経済新聞）が就任され、事務局長は林政に明るい吉藤敬さんが留任されました。4人で知恵を出しあい、さらに幹事会の意見をお聞きして運営してまいりますので、よろしくお願いします。

第11回定期総会の報告

第11回定期総会は、2月22日午後5時から東京・内幸町の日本記者クラブ会議室で開き、①1988年度活動報告、収支決算②1989年度活動計画、収支予算の各議案を決定した。また、任期満了に伴

う役員改選を行い、会長、副会長が交代した。

1989年度は、154万8854円の予算で、次の活動を行うことになった。

研究会は「森林をどう生かすか」を年間テーマとして設定し、森林の持つ諸機能と人間生活のかかわりを中心に行う。このほか、創立10周年記念事業（3月18日東京・高尾の多摩森林科学園の樹木園に、八重桜「松月」を記念植樹した。）、出版活動（わたしたちの森林 国有林を考える、として清文社より出版）、共同取材等を行う。

新役員は次のとおり。幹事は足立氏が新任、監事は大矢氏が辞任し後任に村田氏が選出された以外は留任。なお、杉本前会長、森前副会長はそれぞれ顧問として引き続き指導してもらうことになった。

顧問 森有義、志村富壽、杉本一、森巖夫

会長 増田俊二、副会長 大谷健、二村寛壽、事務局長 吉藤敬

幹事 足立公一郎 井上義臣 岡智 小野田法彦 加倉井弘 岸康彦 黒川宣之 高地英壽 白井正信 高田浩一 高田通夫 辻五郎 寺山義雄 中西實 箱崎道朗 古野雅美 本間義人 松沢譲 馬淵良俊 村林弘 矢島勝夫 山地進

監事 石井健雄 村田貢

山本巖草津町長の講演要旨

総会では、群馬県草津町の山本巖町長から「リゾート開発と山村」と題して、特別講演が行われた。1時間の講演で、相当な分量になったため、その要旨のみを掲載する。

楽しめる町造り

新しい町造りは、発想を転換させないと、他のリゾート地との戦いに勝てない。リゾート開発の基本は、特定の企業や人々だけが儲かるのではなく、地元経済に役立つものでなければならない。クラシック草津を造ることにしているが、いくとおりものデッサンを引き、町民に選んでもらい、それぞれの通りを造る。

天狗山周辺の高台には、大きいホテル、小さいホテル、ペンション、しゃれた喫茶店、土産店もあり、老夫婦が腕を組んでゆっくり散策ができる、森林浴もできる、音楽も楽しめる、スポーツも楽しめる、そのような町造りを目指している。

独創的なデザイン

リゾート開発では、デザインの重要性を考えざるを得ない。恵まれた環境の中で発想を転換させ、新しい魂を入れていかなければならない。草津には白根火山があり、豊富な森林がある。それらを大事にしながら、どういう魂を入れて行くかが大きな課題。できれば日本国民の心を十分にくみとっ

た中で施設を造り、また、国際性にも目を向けなければならない。

リゾートという、どこを見ても金太郎飴で、ゴルフ場、スキー場、テニスコートがあればいいという形になっている。リゾート地は海辺か山に限られるために、金太郎飴にならざるを得ない面はある。しかし、そのような中で、独創的なデザインを考えていかなければならない。

リゾートに対する希望は、自然環境、伝統文化、アウトドア・アクションなど様々で、それらを全部入れた観光地などできるわけがなく、それぞれの特色を持たせることになるが、これは非常にむづかしい問題をはらんでいる。

客が来てくれる施設造り

草津町のリゾート開発の基本は、草津町主導で自然環境と十分に調和の取れた施設を整備、つまり町民の経済、生活に直結することにある。

音楽のある町、それにロマンチック街道も考えている。これは本場西ドイツのロマンティ・シュットラーゼと提携して、姉妹街道契約を結んだ。

リゾート施設を造ることは簡単だが、そこに客が来るか来ないかを、常に年頭において対処しなければならない。どこに行くかを決めるのは客の判断。一つでも多くのイベントを実施したり、素晴らしい町造りのなかで開発をすすめなければならない。

ヨーロッパのように長期滞在型休暇、家族同伴型の旅行が多くなると言われているが、日本国民の性格から、一泊二日か三泊四日の旅行が多く、欧米のように一カ月ものバカンスを楽しむようなことは、1800年の歴史を持つ草津で見限る限り、日本では考えられないと思う。

3月18日、本会10周年を記念 多摩森林科学園にサクラを植える

すばらしい晴天にめぐまれた3月18日、本会発足20周年を記念する植樹が、八王子市廿里町の多摩森林科学園で行われた。

参加者は、来賓として林野庁から松田長官、小沢業務部長、今藤林政課長、高橋経営企画課長、須崎広報官、中野広報二係長、森林総合研究所から小林所長の代理で蒲沼総務部長、石戸森林科学園長、東京宮林局から塩沢局長、また隣接の林業講習所から安藤所長、本会から、増田、杉本現・前会長、大谷、二村両副会長ら13名、総勢23名。

一行は正午、森林科学園に集合、庁舎の裏手に造成中の展示林斜面の上縁部に、日本桜の会から寄贈された「松月」という名の、上品な花で有名な八重桜を植え、増田会長の揮毫による標柱（東京宮林局森林センターから寄贈）を建てた。終わって芽吹きはじめた科学園の庭園を彩る紅白の梅、彼岸桜を背に乾杯、簡単な仕出し弁当で昼食をとりながら一時を歓談、10周年の節目とした。

わたしたちの森 国有林を考える

緑という言葉が氾濫している。だがマスコミは知床問題とか自然保護の問題を大きく取り上げるが、国有林経営が深刻だということはほとんど出ない。これではジャーナリストとしての責任を果していないのではないか—そういう反省から二年ばかりかけて国有林を勉強した。この本はその成果である。

会員の討論、高木文雄、大内力氏ら識者の話、林野庁当局の見解、木曾福島でのシンポジウムを紹介しており、国有林経営を考えるためのわかりやすい、しかも突っ込んだ解説書になっている。関係者だけでなく、広く一般国民にも読んでもらい、緑の論議を地につけてものにしてほしいと願っている。

この本の結論は、国有林経営を根本的に、しかも早急に改革すべきだということである。(清文社、205ページ、税込1350円) (大谷健)

記者クラブだより

88年4月に農政クラブ配属となり、主に構造改善局、林野庁を担当しています。主に東北地方の農業県で記者生活を過ごしてきた割には農業問題に弱く、会員各位のように何十年も農業問題に取り組んでこられた方々と違い、まだまだ農林水産省のエイリアンです。

十数年ぶりに東京で生活を始めるようになったからかも知れませんが、今ほど都市住民の緑、自然に対する欲求が強くなっている時代はないのではないのでしょうか。数年前まではシティボーイ(オールドの類の)の友人らが長野の山奥でログハウス造りに取り組み始めたのを見てもそう思います。

さて、緑・自然への関心は原生的自然の問題だけでなく、ゴルフ場農業、食品汚染問題など国内的にも深く、広い関心を呼んでいるようです。また国際的にもオゾン層破壊、地球温暖化、酸性雨問題など大きな政治問題化しています。林野庁としても保護林の見直しや海外林業協力を力を入れて入るようですが、緑に対する欲求、地球規模での環境破壊に対する不安はそうしたこれまでの行政当局の施策のテンポを上回って吹き出しているのではないかと漠然と考えています。こうした時期に当会に加入させて頂いたことを喜んでいます。(共同通信 小野寺紀彦)

会 員 消 息

秋沢潤一氏の新住所 高知市本町92

佐々木武士氏の新住所 柏市西原5-10-13